

吉
竹
北
道
跡

吉竹北遺跡

—県営経営体育城基盤整備事業（潟3期地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2
0
1
1

2011

新潟県長岡市教育委員会

長岡市埋蔵文化財調査報告書

吉竹北遺跡

—県営経営体育成基盤整備事業（潟3期地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011

新潟県長岡市教育委員会

例　言

1. 本書は、新潟県長岡市寺泊夏戸地内に所在する吉竹北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、県営経営体育成基盤整備事業（潟3期地区）に伴うものであり、平成18年度に長岡市教育委員会が試掘確認調査を行い、平成22年度に、長岡市が新潟県長岡地域振興局から委託を受け本発掘調査を実施した。
3. 試掘確認調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫および県費の補助交付金を受けた。本発掘調査に要した費用は、原因者である新潟県長岡地域振興局が費用の9割を負担した。また、長岡市が費用の1割を負担し、国庫および県費の補助交付金を受けた。
4. 遺物の注記は、遺跡名「吉竹北」の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
5. 調査・整理体制は以下のとおりである。

(試掘確認調査) 平成18年度

調査主体 長岡市教育委員会(教育長 笠輪泰彦)

事務局 長岡市教育委員会科学博物館(館長 山屋茂人)

調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 学芸員 加藤由美子

(本発掘調査) 平成22年度

調査主体 長岡市教育委員会(教育長 加藤孝博)

事務局 長岡市教育委員会科学博物館(館長 山屋茂人)

調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 主任 加藤由美子

調査補助員 今井昭俊(株式会社吉田建設)

現場代理人 徳吉喜彦(株式会社吉田建設)

(整理作業) 平成23年度

調査主体 長岡市教育委員会(教育長 加藤孝博)

事務局 長岡市教育委員会科学博物館(館長 山屋茂人)

整理担当 長岡市教育委員会科学博物館 主任 加藤由美子

6. 本書の執筆・編集は、田中 靖(長岡市教育委員会科学博物館)の指導の元、小林 徳(同)の協力を得て、加藤由美子が行った。

7. 発掘調査で出土した遺物及び、測量図面・写真等の記録類は、長岡市教育委員会で保管している。

8. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。(敬称略)

新潟県長岡地域振興局 三島郡北部土地改良区 寺泊夏戸集落 寺泊大和田集落 寺泊郷本集落

新潟県教育庁文化行政課 社団法人長岡市シルバー人材センター寺泊支部 有限会社成田建材

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	1
1 遺跡の位置	
2 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 調査の方法と経過	4
1 試掘確認調査	
2 本発掘調査と整理作業	
第Ⅳ章 調査の成果	5
1 調査区の設定と基本層序	
2 遺構	
3 遺物	
第Ⅴ章 まとめ	8

挿図・表目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺の古代・中世の遺跡	3
第3図 トレンチ配置及び基本層序	4
第1表 周辺の古代・中世の遺跡	3
第2表 遺構観察表	9
第3表 遺物観察表	9

図版目次

図版 1 調査区全体図	図版 12 遺物実測図 (5)
図版 2 北トレンチ・南トレンチ遺構図	図版 13 遺物実測図 (6)
図版 3 東トレンチ遺構図 (1)	図版 14 遺跡全景・基本層序・遺構写真 (1)
図版 4 東トレンチ遺構図 (2)	図版 15 遺構写真 (2)
図版 5 東トレンチ遺構図 (3)	図版 16 遺構写真 (3)
図版 6 東トレンチ遺構図 (4)	図版 17 遺構写真 (4)・作業風景
図版 7 東トレンチ遺構図 (5)	図版 18 遺物写真 (1)
図版 8 遺物実測図 (1)	図版 19 遺物写真 (2)
図版 9 遺物実測図 (2)	図版 20 遺物写真 (3)
図版 10 遺物実測図 (3)	図版 21 遺物写真 (4)
図版 11 遺物実測図 (4)	

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成14年6月、新潟県長岡地域振興局（以下、「振興局」と、寺泊町教育委員会（以下、「町教委」）は、長岡市寺泊地域において計画された、経営体育成基盤整備事業（潟地区）に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。事業は対象面積505haを5地区に分割し、順に工事に着手する計画であった。二者間での協議の結果、事業の対象地には複数の周知の遺跡が存在し、未だ周知化されていない遺跡が存在する可能性があることから、事業採択を受けた地区から順に町教委が試掘確認調査を行い、その結果を元に、再度、両者で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を持つこととなった。平成18年1月1日、寺泊町は長岡市と合併し、経営体育成基盤整備事業（潟地区）における一連の発掘調査も、新市へと引き継がれた。

平成18年4月、潟3期地区（寺泊夏戸・寺泊大和田・寺泊郷本）が事業採択されたことに伴い、長岡市教育委員会（以下、「市教委」）は、同10月10日から23日にかけて、試掘調査を実施した。この調査の結果、新たに本報告書である吉竹北遺跡（遺跡No.1265）を発見し、周知の遺跡であった吉竹西遺跡（遺跡No.1034）、三反田南遺跡（遺跡No.1226）の範囲の拡大を確認した。これを受け、市教委と振興局は同12月に協議を持ち、遺物量が多く、遺構も確認された吉竹北遺跡について、而工事部分は盛り土により遺跡の保護を行い、掘削が不可避な排水路・パイプライン部分については、工事着手前に本発掘調査を行うことで合意した。また、吉竹西遺跡は慎重工事、三反田南遺跡は工事立会として取り扱うこととした。

平成22年6月23日、振興局と長岡市は吉竹北遺跡発掘調査の基本方針を定めた「吉竹北遺跡に関する協定書」を締結した。協定書には、発掘調査は市教委が主体となって平成22年度に行い、整理作業と報告書の刊行は調査終了の翌年度中とすること、さらに、発掘にかかる費用の9割は振興局が負担し、残りの1割は長岡市が負担することなどが明記された。

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の位置

吉竹北遺跡は、新潟県長岡市寺泊夏戸地内に所在する（第1図）。信濃川左岸に発達する東頸城丘陵は、海岸線と平行しながら南南西から北北東へと延び、寺泊地域はその先端部に当たる。先端部は西側丘陵と東側丘陵に分岐する。吉竹北遺跡はこの西側丘陵から派生した小丘陵の南斜面裾部に立地する。

西側丘陵と東側丘陵の間を流れる2級河川・島崎川は、しばしば排水不良を起こすことで知られている。西側丘陵に遮られて日本海側への排水路を持てないことが、元々の河床勾配が極端に小さく、流速が遅いことがその原因である。そのため、大河津分水路通水以前は、島崎川下流の寺泊本山地区には、円上寺潟という大きな潟が存在



第1図 遺跡の位置 (1/250,000)

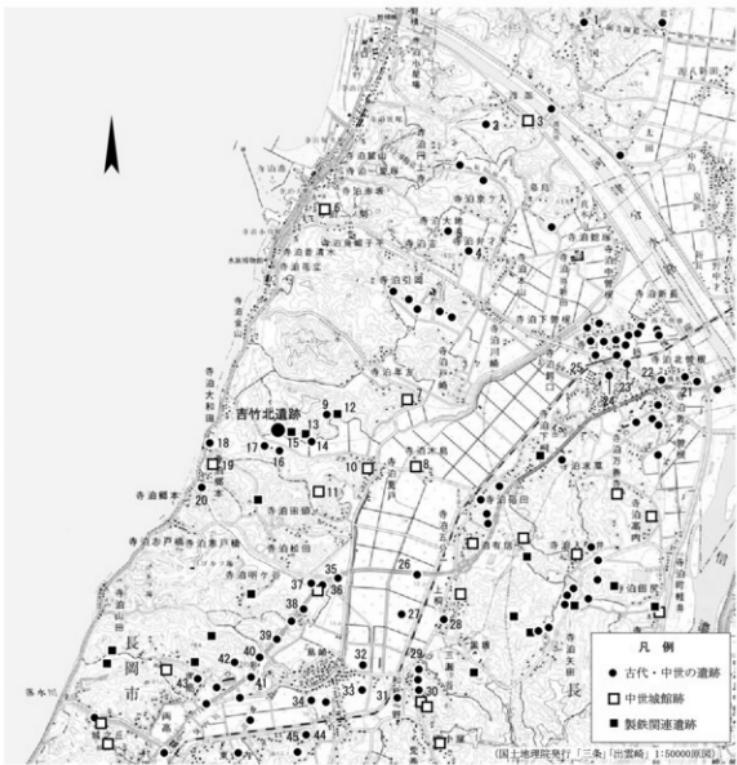
した。基盤整備事業名にある「湯地区」は、かつての円上寺湯一帯を指し示す名称である。このような島崎川流域の堆積物の基本は粘土・シルトで、大量の腐植土がそれに伴う、極めて軟弱な地盤である。吉竹北遺跡は、比較的地域の安定した丘陵裾部に立地し、丘陵の基盤層を生活面として利用する。同じような土地利用の形態は、寺泊地域の現在の集落にも見ることができる。遺跡の現況は田んぼで、標高は13.3～14.6mを測る。遺跡の範囲は南北40m、東西80mの広さを持ち、推定面積は約3,000m²である。

2 周辺の遺跡（第2図・第1表）

吉竹北遺跡が所在する島崎川流域一帯は、古代において越後国古志郡に属していたと考えられる。特に遺跡の南方にあたる長岡市和島地域は、これまでの発掘調査の成果により、古志郡の中核をなす地域であったことが知られている。古代の遺跡は旧島崎川の上・中流域に多く、さらに、東頭城丘陵の東側丘陵先端部が信濃川に接する、現在の長岡市寺泊竹森地区周辺にも集中する。

西側丘陵の裾部に位置する八幡林官衙遺跡（41）では、平成2年度から4か年の発掘調査が行われ、大型掘立柱建物や道路遺構、「郡司符」「沼垂城」の木簡など、官衙関連の遺構や遺物の発見が相次いだ。遺跡の存続時期は8世紀前半から10世紀前半で、8世紀前半は国の機関として、9世紀前半は古志郡の大領の館跡として機能したと考えられる。平成7年3月に国史跡に指定された。八幡林官衙遺跡に程近い、下ノ西遺跡（44）も郡衙関連遺跡との見方が強い。7世紀中頃から10世紀前半の掘立柱建物が70棟以上確認され、I区東で見つかった四面庇付建物は、縦21m×横12mの規模を誇る。同種の建物としては古志郡で最大である。V区で検出された正方形の区画溝に囲まれた建物群は、駅家など通信伝達機関に関わる施設と想定される。門新遺跡（26）は、旧島崎川の自然堤防上に立地する10世紀代前半の遺跡である。平成6年度に発掘調査が行われ、平安時代の掘立柱建物11棟、井戸、溝、船着場遺構が検出された。門新遺跡の出現に前後して、八幡林官衙遺跡や下ノ西遺跡の官衙的機能は衰退する。このことから、門新遺跡は律令体制の変質後に出現した新興富豪層の居宅と捉える説が有力である。なお、古志郡を通る古代の官道「北陸道」は、従来海岸ルートと内陸ルートの2つのルートが想定されていた。しかし、一連の発掘調査成果により、現在では、旧島崎川沿いを通る内陸ルートの可能性が非常に高いとされている。近年も、川東遺跡（32）、浦反甫東遺跡（33）、吉沢遺跡（42）、坂谷遺跡（43）等で調査は続いている、その成果報告が待たれる。一方、東頭城丘陵の東側丘陵に目を転じると、その先端部に横瀧山廬寺（24）がある。横瀧山廬寺は古代の寺院跡で、昭和51年から4次にわたる発掘調査が行われ、2棟の基壇が確認された。1棟は平面12m×10mの規模を誇る木造外装基壇で、金堂跡と推定されている。膨大な量の平瓦・丸瓦とともに、埴仏や鶴尾が出土した。また、白鳳時代に遡る高句麗系の單弁八片蓮華文の軒丸瓦が採集されている。横瀧山の北側、東側丘陵先端部に接した沖積地は、遺跡が密集する地域である。太屋敷遺跡（22）、京田遺跡（23）、諏訪田遺跡（25）など、平安時代の遺跡が自然堤防上に立地する。

中世の遺跡では城館跡が目立つ。吉竹北遺跡の周辺にも、年友城（7）、夏戸城（10）、田頭城（11）、伊奈胡城（19）、木島砦（8）がある。なかでも中心的な存在であるのが、室町時代から戦国時代にかけて上杉氏の武将として活躍した志駄氏の居城、夏戸城である。山上に要害を持ち、山麓に居館や城下を構えた、戦国時代後期に典型的な根小屋式城郭である。同じく中世の遺跡で数が多いのは、製鉄遺跡である。東頭城丘陵の裾部には多くの製鉄遺跡が存在する。これはこの地域の特色でもあり、遺跡の詳細な時期は不明であるが、古代から中世までの時期幅が想定される。吉竹北遺跡においても製鉄関連遺物が多く出土しており、近接する万吉はざ場製鉄跡（15）との関係が示唆される。



第2図 周辺の古代・中世の遺跡 (1/70,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	国上寺遺跡群	古代 中世	16	古竹東	古代	31	北野丸山	古代(平安)
2	天王	古代(平安) 中世	17	古竹西	古代	32	川東	古代(平安) 中世
3	渡部城	中世(戰國)	18	七ツ石	古代	33	浦反南東	古代(平安)
4	弁才天塹跡	古代	19	伊奈胡城	中世(室町～戰國)	34	浦反南西	古代(平安)
5	向尾敷	古代 中世	20	上太	古代	35	大武	古代(平安) 中世
6	赤坂山城	中世(南北朝)	21	日光烟	古代(奈良・平安) 中世	36	奈良崎	古代(平安) 中世
7	牛友城	中世	22	太原敷	古代(平安)	37	鍵ヶ入製鉄	古代～中世
8	木島砦	中世	23	京田	古代(平安)	38	鍵ヶ入南	古代(飛鳥～平安) 中世
9	夏戸遺跡	古代	24	横瀬山魔寺	古代(白鳳～平安)	39	立野大谷製鉄	古代～中世
10	夏戸城	中世(戰國)	25	諏訪田	古代(平安)	40	山田郷内	古代(平安) 中世
11	田頭城	中世(室町～戰國)	26	円新	古代(平安)	41	八幡林官衙	古代(奈良・平安) 中世
12	ドンコタカラ	古代 中世	27	上新田	古代	42	吉沢	古代(平安) 中世
13	三反田	古代 中世	28	上根神社裏	古代 中世	43	坂谷	古代(平安) 中世
14	三反田南	古代 中世	29	北野大平	古代	44	下ノ西	古代(飛鳥～平安) 中世
15	万吉はざま	古代 中世	30	和島中道	古代	45	旧北畠中学校	古代

第1表 周辺の古代・中世の遺跡

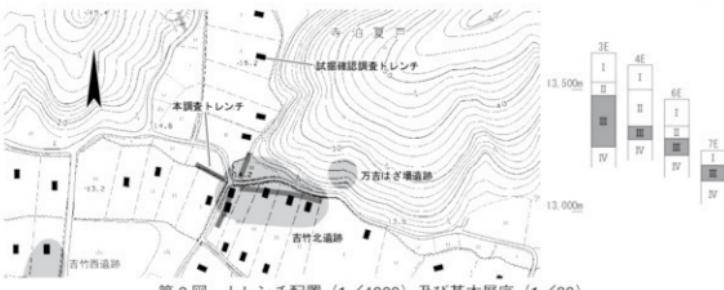
第III章 調査の方法と経過

1 試掘確認調査（第3図）

吉竹北遺跡は、県営経営体育成基盤整備事業第3期地区の試掘調査により発見された遺跡である。調査は市教委が主体となり、平成18年10月10日から23日かけて実施した。トレンチ数は126か所、総調査面積は756m²である。また、平成21年2月5日には、遺跡の範囲特定のため確認調査を実施した。トレンチは1か所、面積は6m²である。二度にわたる調査の結果、表土下15~40cmで古代の遺物包含層を確認し、ピット2基を検出した。出土遺物は須恵器が主体を占め、土師器は少量であった。市教委は調査結果を元に振興局と協議を行い、遺跡範囲内の面工事部分は盛り土工法を採用することで遺跡を保護し、工事が回避できない排水路とバイブルайнの部分のみ、事前に本発掘調査を行うこととなった。

2 本発掘調査と整理作業

本発掘調査は面工事の進捗状況に合わせ、平成22年度の稲刈り後に実施した。9月21日から調査区の基本測量を行い、重機による表土除去を行った。10月4日から本格的な発掘調査を開始した。トレンチ壁面の整形、土層観察用と排水用を兼ねたサブトレンチの掘削を終え、12日から遺物包含層の発掘を開始した。東トレンチでは、古代の須恵器と共に製鉄関連遺物が大量に出土した。遺物の時期はほぼ平安時代に限定され、遺構もこの時期に伴うことが予想された。19日から遺構検出を始め、遺物量が多かった東トレンチで、溝・ピットなど遺構が密集して検出され始めた。21日、遺構・遺物の少なかった北トレンチの完掘状況写真を撮影した。28日からは調査の終了した部分から、遺構の平面測量に着手した。29日、南トレンチの完掘状況と、東トレンチの遺構検出状況を撮影した。30日、西トレンチの完掘状況の写真を撮影した。10月下旬以降は雨が多く、作業開始時の水抜きに多くの時間を割くようになった。11月1日、東トレンチで検出したSK02を断ち切った結果、底面付近から黒漆椀が出土した。また、一部のピットには柱根が遺存することも明らかになった。13日、遺構の断面測量を終えた。その後、全ての作業道具を現場から撤去し、現場調査を終えた。整理作業のうち、遺物の水洗い・注記は平成22年度に行い、遺物実測、写真撮影等、報告書の作成に係る諸作業は、平成23年度に行なった。遺物と遺構図面のトレースとレイアウトを行い、平行して遺物観察表のデータの入力、原稿の執筆、編集作業を行なった。SK02から出土した黒漆椀は出土状態が脆弱であったため、高級アルコール法による保存処理を株式会社吉田生物研究所に委託した。



第3図 トレンチ配置 (1/4000) 及び基本層序 (1/20)

第IV章 調査の成果

1 調査区の設定と基本層序

排水路及びバイブルайн予定地に、トレンチを4本設定した（図版1）。総調査面積は450 m²である。調査に先立ち、基準杭1（日本測地系 座標値 X=5271.733, Y=3365.062）、基準杭2（同 座標値 X=5244.279, Y=3400.913）から、任意の10mメッシュのグリッドを設定した。グリッドは北西隅を基点とし、西から東へ向かって0から12までの数字を、北から南に向かってAからKまでの英字を割り当て、大グリッドとした。また、各グリッドを西から東へ2mごとに区切り、1から5までの数字を当てて小グリッドとした。これらを組み合わせて、8E-3, 9A-4のように表記し、遺物の出土位置や遺構の位置の記録に用いた。

基本層序はI～IV層に分けられる。

I層：10YR3/1 黒褐色粘質土（粘性・しまり弱、表土・耕作土）

II層：10YR6/1 褐灰色粘質土（粘性・しまり強）

III層：10YR4/1 褐灰色粘質土（粘性・しまり強、炭化物を中量含む、古代・中世の遺物包含層）

IV層：10YR7/1 灰白色粘質土（粘性・しまり強、地山）

さらに、東トレントの7E・8EグリッドのIII層上面で、古代の遺物を含む整地土（10YR2/1 黒色粘質土 粘性・しまり強、炭化物中量含む）を確認した。詳細については後述する。

東トレントの西半は、部分的に後世の削平を受けていた。古代・中世の遺物包含層であるIII層は、全てのトレントで確認でき、遺物量は東トレントが突出している。調査は無遺物層であるI・II層を重機で除去し、III層（包含層）は作業員が発掘し、IV層上面で遺構の検出を行った。

2 遺構

検出した遺構は、掘立柱建物（SB）1棟、土坑（SK）7基、溝（SD）20条、不明遺構（SX）2基、ビット（SP）43基である。遺構は東トレントに集中する。西トレント、北トレント北半、及び南トレントでは遺構は確認できなかった。基本的な遺構確認面はIV層上面であるが、一部の遺構については、整地土上面で検出した。以下に、主な遺構の概要について述べる。

整地土（図版4） 東トレント7E-3から8E-3グリッドのIII層上面で検出した。III・IV層上面の凹凸を解消するため、部分的に整地が行われている。整地土中から、土師器の無台碗（63）・有台碗（66）・器台（75・76）、須恵器の無台坏（107・109・113）・有台坏（96・102）等が出土した。多少の時期幅は見られるが、9世紀後半を中心とした土器が多く、完形品も含まれる。

SB01（図版6） 東トレント7Eグリッドに位置する。SP44・SP07・SP15・SP09からなる、三間分の柱列を確認した。建物は調査区外の北東側に伸びる可能性がある。検出した柱列を桁行きと仮定すると、建物の主軸方向はN-37° - Eとなる。柱間寸法は1.8～2.0m前後で、柱の掘り方は長径40～76cmの平面円形、ないし梢円形を呈す。掘り方の埋土はIII層とIV層の混合土で、ブロック化したIV層と微細な炭化物粒子が認められる。SP09はSD11を、SP15はSD12をそれぞれ切っている。

ピット底面には柱根が遺存する。SP07は径20.9cm（157）、SP09は径22.0cm（158）、SP15は径23.0cm（159）の、いずれも芯持丸太の柱根である。SP44にも柱痕跡が認められ、他と同規模の柱が存在していたものと考えられる。柱根または柱痕跡の底面深度は、遺構確認面から-42cmから-80cmとばらつきがある。遺物はSP15から土師器の甕（1）が出土したのみで、時期の詳細は不明である。

SK02 (図版6) 東トレンチ6E-2 グリッドに位置する。断面が不整な台形を呈し、覆土に炭化物を多く含む。3層・4層に炭化した木材が集積する状況が見られ、3層から炭化材（163）に混じって完形の黒漆椀（162）が出土した。何らかの祭祀や埋納行為に伴う遺物と考えられ、深度74cmと浅いものの、井戸の可能性も視野に入れておきたい。遺構の時期は、楕の存在から中世と推定される。

SK03 (図版6) 東トレンチ6E-5 グリッドに位置する。調査時に土坑として捉えたが、覆土の堆積状況には柱の痕跡が認められ、ピットとして考えるべき遺構である。鉄塊（166）が出土した。

SK05 (図版2) 南トレンチ4G-3 グリッドに位置する。断面は台形を呈し、覆土は4層に水平堆積する。遺物が出土していないため時期は不明であるが、覆土の特徴から中世以降である可能性が高い。

SK06 (図版6) 東トレンチ11E-4 グリッドに位置する。62cmの深さを持つ比較的大きな土坑である。覆土の1層・2層に炭化物を多く含む。近接するSD20と同じく、横樋（48）が出土した。

SD01・SD02・SD03・SD04・SD05 (図版5) 東トレンチ9E-3 から 10E-4 グリッドに位置する。最大でも深さが14cmしかない、断面弧状の浅い溝群である。5本の溝が方向をほぼ同じくして等間隔に並ぶことから、耕作溝である可能性も考えられる。SD05出土の須恵器の壺蓋（11）は径が大きく、やや古いか。

SD07 (図版5) 東トレンチ8E-3 から 9E-3 グリッドに位置する。南北方向に延びる1本の溝に、東西方向に延びる2本の溝が連結する。互いの溝に切り合はは確認できず、当初からこの形に掘削されたと考えられる。幅は24cmと狭いが、断面は底面が平らな不整な台形状を呈し、明確な掘り込みという印象を受ける。西側で検出したSD11・SD19と一連のものとも考えられるが、断面の形状や覆土は明らかに異なる。

SD10 (図版4) 東トレンチ8E-3・4 グリッドに位置する。III層上面に貼られた整地上上面で検出した。完形に近い須恵器無台杯（19～22）、砥石（154）など出土遺物が多い。須恵器の特徴から、遺構の時期は9世紀後半か。覆土は炭化物を含んだ粘質土で、1層には微細な地山ブロックが大量に含まれる。

SD11 (図版4) 東トレンチ7E-1 から 8E-2 グリッドに位置する。整地が施される8E-3 グリッドの落ち込み状の広がりに端を発し、北北西へと直線的に伸び、その先は調査区外へと続く。掘立柱建物の雨落ち溝、または長軸方向がそろうSD12・SD13・SD14・SD15・SD16と共に、耕作溝の可能性が考えられる。整地上除去後の平面形は、南南東の溝幅が不定形に大きく開く。底面の標高は北北西が高く、南南東へと低くなる。土師器の有台碗（26・27）や瓶（29）、須恵器壺蓋による転用硯（30）、有台杯（31～33）が出土した。9世紀後半から10世紀代にかけての時期幅が認められる。

SD12・SD13・SD14・SD15・SD16・SD17 (図版4) 東トレンチ7E-1 から 8E-2 グリッドに位置する。SD12・SD13・SD14・SD15・SD16は、北北西-南南東へ長軸方向を同じくして伸びる。

SD18・SD19 (図版4) 東トレンチ7E-4 から 8E-2 グリッドに位置する。整地上を除去した後、IV層上面で検出した。SD18は両端でSD14・SD15と連結する。SD19はSD11の延長線上にある小溝である。SD11の底部部分である可能性が高い。

SP22 (図版7) 東トレンチ7E-2 グリッドに位置する。深さ72cm、本遺跡のピットでは深い部類に入る。覆土の体積状況から柱痕跡が確認できる。

SP23 (図版7) 東トレンチ6E-5 グリッドに位置する。柱痕跡が確認できる。

SP25 (図版7) 東トレンチ5E-4 グリッドに位置する。深さは36cmで柱根（160）が残る。他のピットが集中する6E・7E・8E グリッドとは距離が離れ、覆土も異なるため、時期は中世まで下る可能性がある。

SP26 (図版7) 東トレンチ6E-5 グリッドに位置する。柱痕跡が認められる。

SP38 (図版7) 東トレンチ7E-4 グリッドに位置する。今回検出した中では大型のピットである。SD11

を切って掘り込まれる。須恵器の無台坏（5）と土師器の器台（6）が出土した。

SP43（図版7） 東トレンチ 6E-2 グリッドに位置する。トレンチ壁面で検出した。柱の抜き取り痕、もしくは2本並んだ柱痕跡であると考えられる。

SP46（図版7） 東トレンチ 6E-2 グリッドに位置する。トレンチ壁面で検出した。新田2本の柱痕の切り合いか確認でき、新しい方のピットに柱根（161）が残存する。建物の建て直しに伴う切り合いか。

3 遺物（図版8～13）

出土した遺物はコンテナで24箱を数え、そのうち包含層出土が8割を占める。種別では、被熱石・鉄滓など製鉄関連遺物が15箱、平安時代の須恵器・土師器が8箱、弥生土器・黒色土器・灰釉陶器・珠洲焼・巡方・砥石等が合わせて1箱、他に漆器椀や柱根等の木質遺物がある。なお、製鉄関連遺物は、紙面の関係上全て掲載できないため、羽口と鉄塊のみ図示した。以下に、種別ごとに概要を述べる。

須恵器 器種は、坏蓋・無台坏・有台坏・有台楕・有台皿・高杯・壺蓋・短頸瓶・長頸瓶・横瓶・甕がある。坏蓋は有台坏とセットになる蓋で、つまみの形状から擬宝珠形のもの（52・81・87）と、そうでないもの（42・77～79）とに大別できる。30・42・82・87は転用硯として使用され、内面に墨痕が残る。無台坏は、今回出土した須恵器の中で最も個体数が多い器種である。口径11.4～12.0cm前後、器高2.8～3.3cm前後の小型のもの（105～111ほか）と、口径12.6～14.0cm前後、器高2.9～3.3cm前後の大型のもの（112～120ほか）がある。小型・大型とも、体部が底部から鋭角に直線的に伸びるもの（106～110・114～118ほか）と、底部と体部の境目がやや丸みを帯び、体部が若干内湾気味に広がるもの（122・124ほか）が存在し、前者が圧倒的に多い。120は内外面に漆状の黒色物質が付着する。有台坏は、底径3.3～5.0cm前後、器高4.6～5.0cm前後の小型のもの（7・32・88～93ほか）と、底径6.5～8.6cm前後の中型のもの（95～99ほか）、底径9.6cm前後の大型のもの（101・102）がある。このうち、本遺跡で主体を成すのは小型のタイプである。高台の形状は、逆「ハ」の字状を呈するもの（88・89・92・93・97・101ほか）が多く、他に、垂直に立つものの（90・91・100ほか）、「ハ」の字状に踏ん張るもの（54・102）がある。「ハ」の字状のものは少ない。体部の形状は無台坏と同じく、体部が底部から鋭角に直線的に伸びるもの（90・91・95・99ほか）と、底部と体部の境目がやや丸みを帯びるもの（8・10・33・98・102ほか）に大別でき、後者には体部外面の下端にケズリを伴うものが含まれる。有台楕は103のみで、高めの高台が付く。104の有台皿は金属器の模倣と考えられ、体部外面の中程に短い跨が巡る。

高杯は37のみ出土した。甕は、小型（136・138）と大型（23・144・145・147）があり、138は横瓶の可能性も考えられる。横瓶（44・48・137・139）は、本遺跡での出土率が高い器種である。甕には短頸瓶（128～131）、長頸瓶（133）、その他（24・132・134・135・140～142）がある。132は体部外面下半にヘラケズリを施し、金属器を模倣し、肩部外面に2本1単位の沈線が巡る。また、86は瓶類の肩部を転用硯として使用したものである。壺蓋（127）は、短頸瓶とセットになる蓋である。天井部外面に金属器模倣の2本1単位の沈線が2単位巡る。本遺跡出土の須恵器には11・85・98・102など、8世紀後半の特徴を持つ個体も含まれるが、大半を占めるのは佐渡の小泊窯が操業する9世紀代の個体である。出土資料における小泊産製品の比率も極めて高い（第3表-1）。

土師器 無台楕・有台楕・甕・壺・器台がある。須恵器に比べて出土量は少ない。無台楕は、底径5.8cm前後の小型のもの（14・41・46ほか）と、底径6.6～8.0cm前後の大型のもの（60～64ほか）があり、底部はすべて静止系切りである。有台楕（26・27・66・67）は、「ハ」の字状に広がる高台が付く。甕は、「く」の字状口縁の端部を丸く仕上げるもの（1・39・69）、端部を短く摘み上げるもの（2）、端部に面を持たせ

るもの（68）の3種がある。47・70は、須恵器の叩き技法による甕の体部である。甕（29）は1点のみ出土した。6・40・71～76は器台で、6・40・71・74は体部に円孔を穿つ。粘土の輪積み痕とナデによる指頭圧痕が明瞭に残り、内外面とも比熱する。土師器の時期は、9世紀後半から10世紀代と考えたい。

その他の土器 56は弥生時代後期の東北系の壺の体部である。2本1単位で平行沈線と連弧文が描かれる。57は古墳時代の土師器の小型丸底壺である。58は黒色土器の無台碗で、内面に黒色処理が施される。143・148・149は灰釉陶器である。143は水瓶の頸部で、西トレンチから出土した。体部との接続部に糸切り痕が認められ、その上に補修用と思われる漆が付着する。150～152は珠洲焼である。

石製品・製鉄関連遺物・木製品 153・154は砥石である。155は、南トレンチで出土した緑色凝灰岩の剥片で、玉の材料にもなりうる。156は石帶の巡方である。一边4.1cm、厚さ0.6cmを測り、2穴1対の縫じ穴が四隅にある。1辺を欠損し、表面は風化が進む。157～161は柱根である。158以外は、底面は平底である。158は、底部に4方向から密なハツリを施し尖底に仕上げ、側面には幅4cm前後の溝状の抉りを施す。162はSK02出土の漆椀である。材はトチノキを使用する。ほぼ完形で土圧による歪みが著しい。器面に黒漆が施され、見込みに梢円形の孔を穿つ。穿孔は内面から行われている。165は羽口の先端部である。166は鉄塊で、径2.2cmの不整な円形を呈し、ヘラ状工具によるハツリのような調整痕が認められる。

第V章　まとめ

包含層・整地土・遺構から出土した遺物は、概ね8世紀後半から10世紀にかけての時期幅があり、特に9世紀後半から10世紀初頭にかけての資料が多い。個々の遺構の時期も、この時期幅の中で考えている。また、東トレンチで検出した掘立柱建物とSD11等の構群は軸がそろっており、両者の間に大きな時期差はないと思われる。黒漆椀が出土したSK02は中世の遺構と考えられ、他にもSP25等、中世の遺構が混在する可能性がある。

今回は肉眼による須恵器の産地同定を行い、無台碗・有台碗の9割以上が小泊産という結果に至った。一方、阿賀北地域やその他の非小泊産と考えられる個体も確認でき、これらの産地の特定、ひいては須恵器の流通の実態解明が今後の課題のひとつである。なお、東トレンチの包含層から大量に出土した製鉄関連遺物は、近接する万吉はざ場跡からの流れ込みの可能性が高い。また、包含層から出土した巡方については、本遺跡が営まれる9世紀代は、和島地域で官衙遺跡が機能する時期に当たることから、それらの官人と本遺跡とが何らかの接点を持ったと仮定したい。以上のような遺構や遺物の内容から、本遺跡は8世紀後半から10世紀にかけて営まれた当時の一般的な集落と考えられ、現在の夏戸集落の村落形成が、少なくともこの時期にまで遡ることを証明するものであろう。

参考文献

- 寺治町 1991 『寺治町史』資料編1 原始・古代・中世
和島村 1996 『和島村史』資料編1 自然・原始・古代・中世・文化財
和島村教育委員会 2003 『和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡IV』
和島村教育委員会 2005 『八幡林遺跡IV—一般国道116号和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

第2表 遺構觀察表

* ()内の数値は、調査区内での最大長軸を表す。

第3表-1 遺物觀察表(土器・木製品)

第3表-2 遺物觀察表(石器・石製品・製鉢関連遺物)

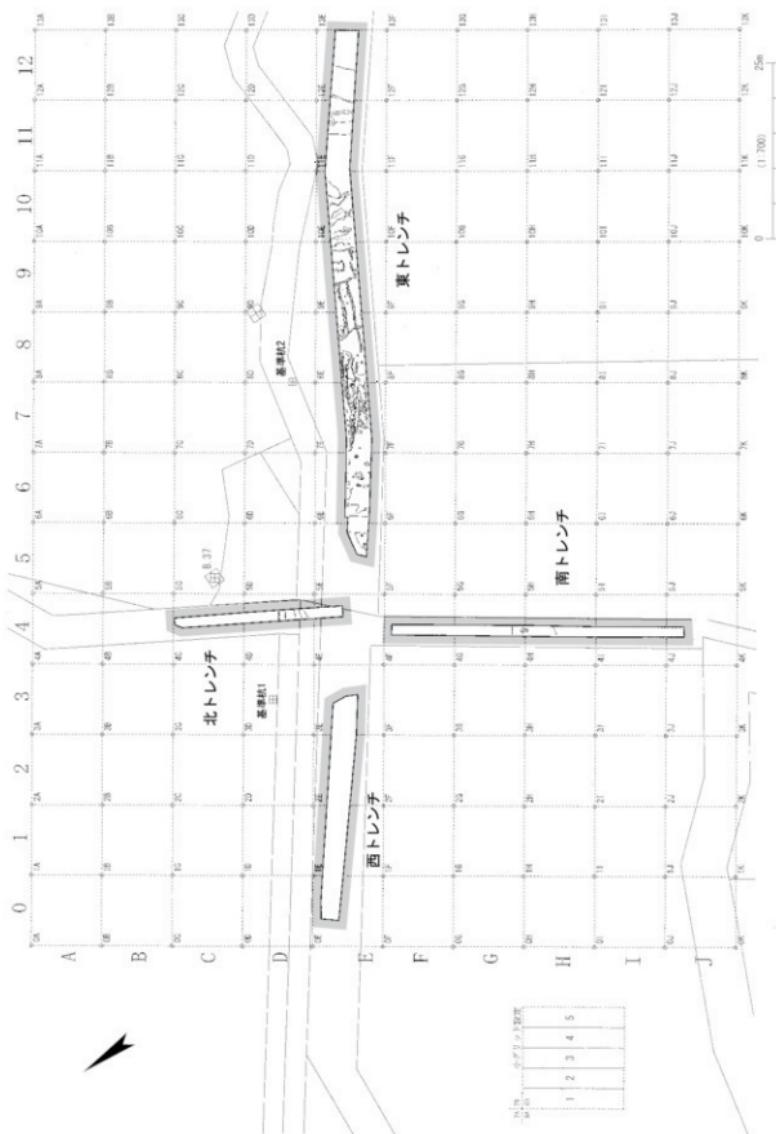
固形 物種 No.	高さ位置 m	通名	輪位	種別	直径 (cm)			重量 (g)	備考
					高さ	幅	厚さ		
12	1.5	シラカバ	下部	板塊	樹幹	6.1	5.1	1.1	36.80
	1.5	シラカバ	上部	板塊	樹幹	5.3	4.3	0.9	24.68
	1.54	シラカバ	下部	板塊	樹幹	5.3	4.3	0.9	24.68
	1.54	シラカバ	上部	板塊	樹幹	5.3	4.3	0.9	24.68
13	6.5	シラカバ	下部	板塊	樹幹	4.1	3.4	0.6	20.33
	6.5	シラカバ	上部	板塊	樹幹	4.8	4.0	1.9	22.10
	6.6	シラカバ	下部	板塊	樹幹	3.2	2.3	2.1	17.35
	6.6	シラカバ	上部	板塊	樹幹	3.2	2.3	2.1	17.35

第3表-3 遺物観察表(柱・杭)

回数 %	遺傳子	遺傳子型	遺傳子名	部位	因数量 (cm)	水位	参考	
							高さ	幅さ
13	137 遺伝子P	PF11	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.5 厚さ 20.92±1.53	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。
	137 遺伝子P	PF12	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.0 厚さ 20.92±0.23	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。
	138 遺伝子P	PF13	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.0 厚さ 20.92±0.23	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。
	139 遺伝子P	PF14	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.0 厚さ 20.92±0.23	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。
	140 遺伝子P	PF15	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.0 厚さ 20.92±0.23	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。
	141 遺伝子P	PF16	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.0 厚さ 20.92±0.23	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。
	142 遺伝子P	PF17	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.0 厚さ 20.92±0.23	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。
	143 遺伝子P	PF18	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.0 厚さ 20.92±0.23	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。
	144 遺伝子P	PF19	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.0 厚さ 20.92±0.23	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。
	145 遺伝子P	PF20	遺傳子名	部位	高さ 26.5 幅さ 22.0 厚さ 20.92±0.23	水位 8.0	上部丸丸。平底。	正丸丸。

調査区全体図

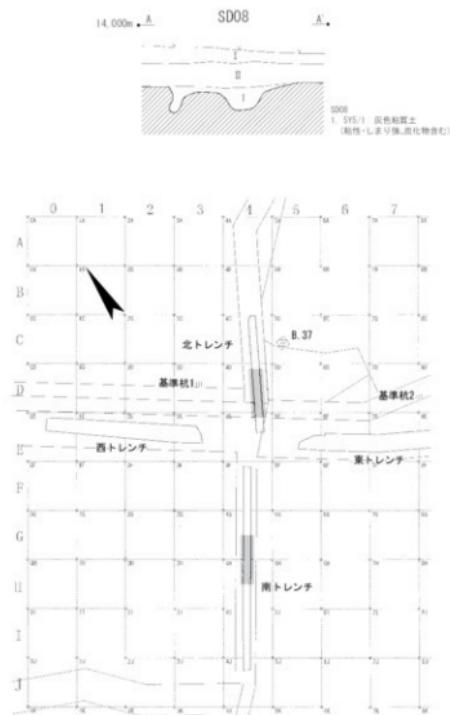
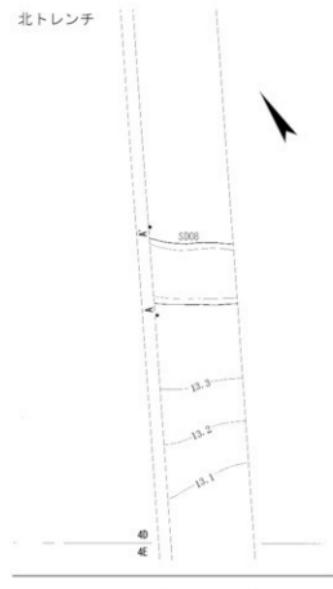
図版1



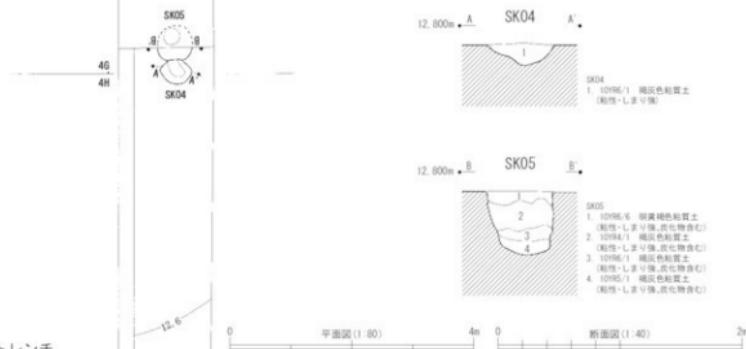
図版2

北トレンチ・南トレンチ遺構図

北トレンチ

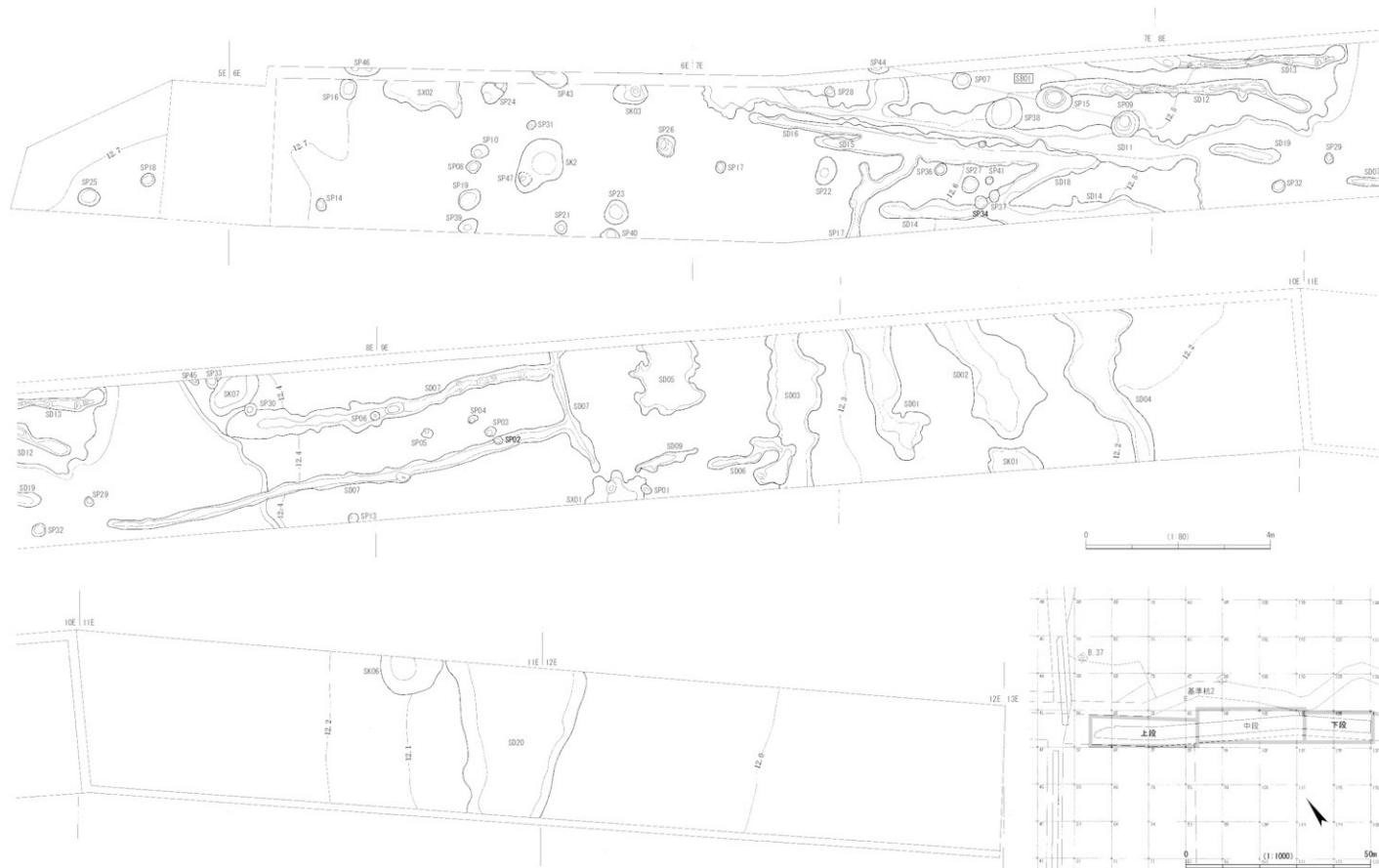


南トレンチ



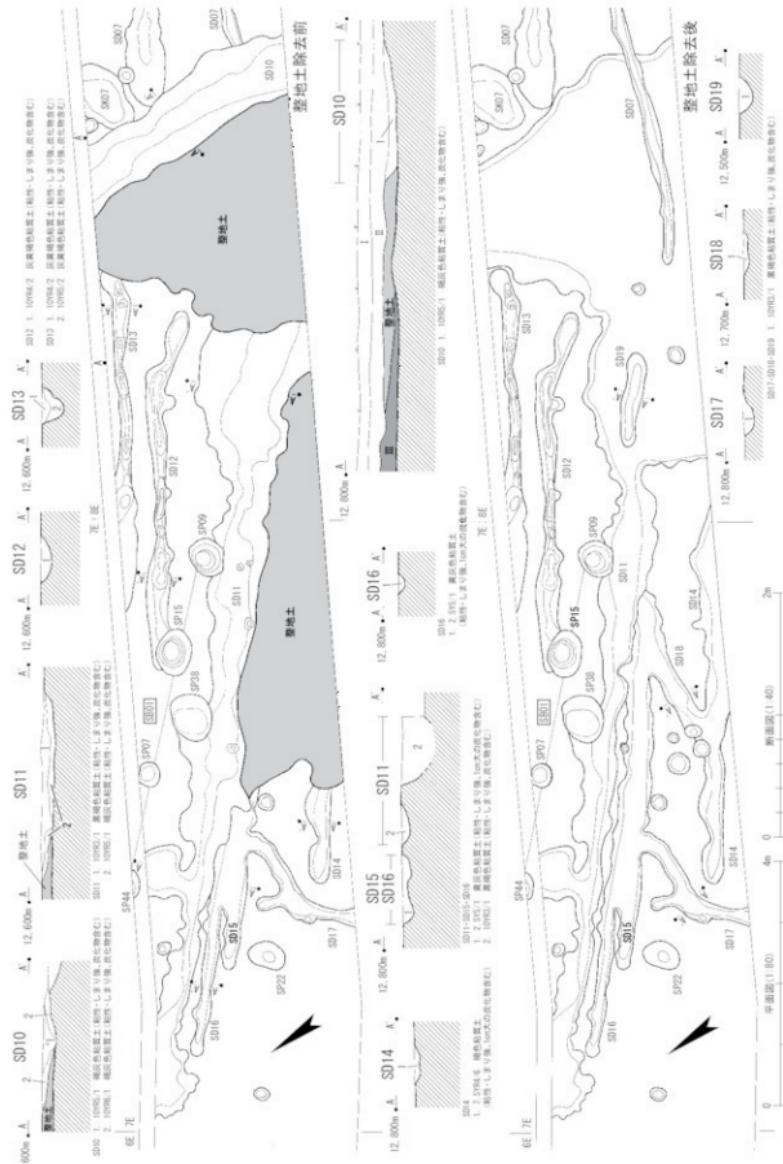
東トレンチ遺構図 (1)

図版3



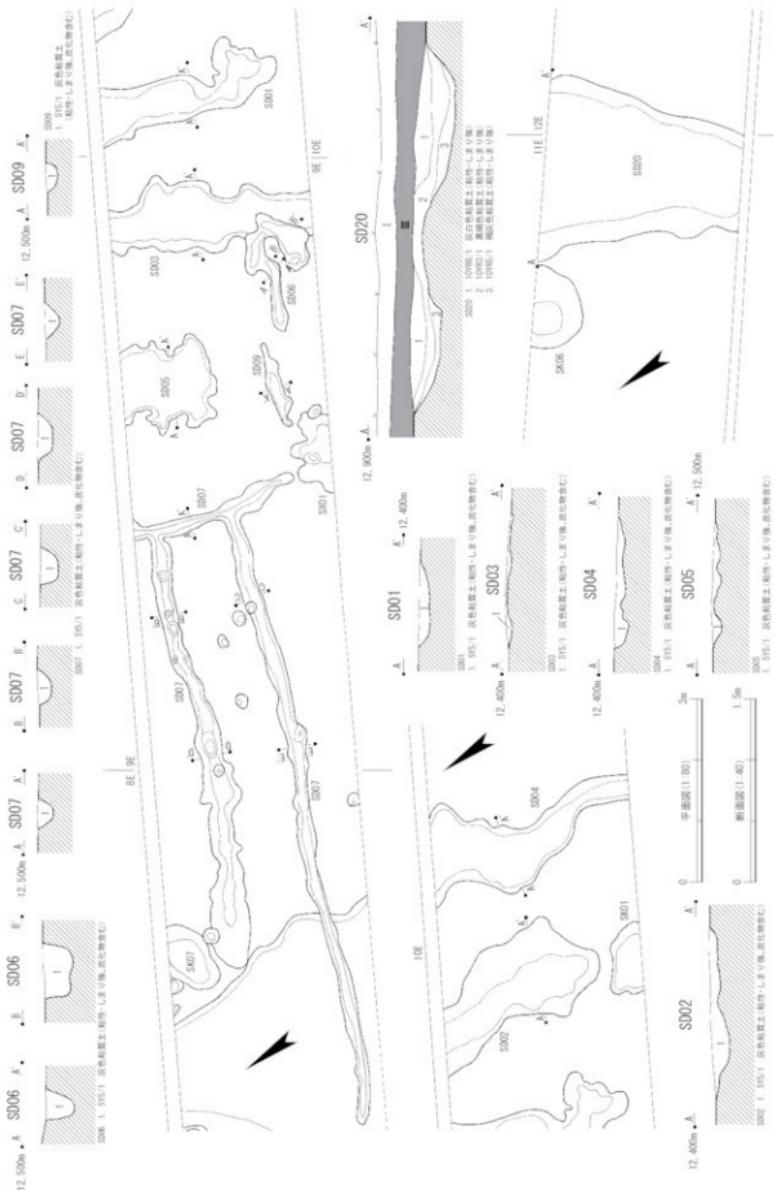
東トレント遺構図 (2)

図版4



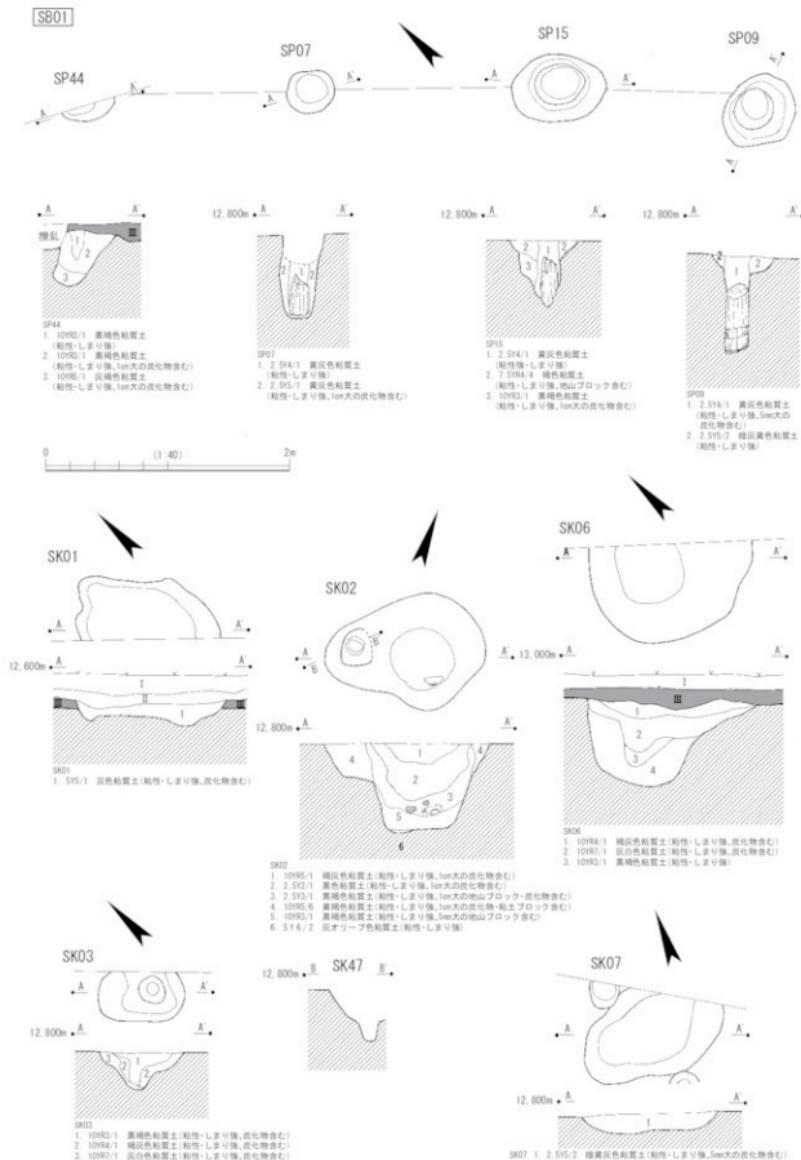
図版5

東トレンチ遺構図 (3)



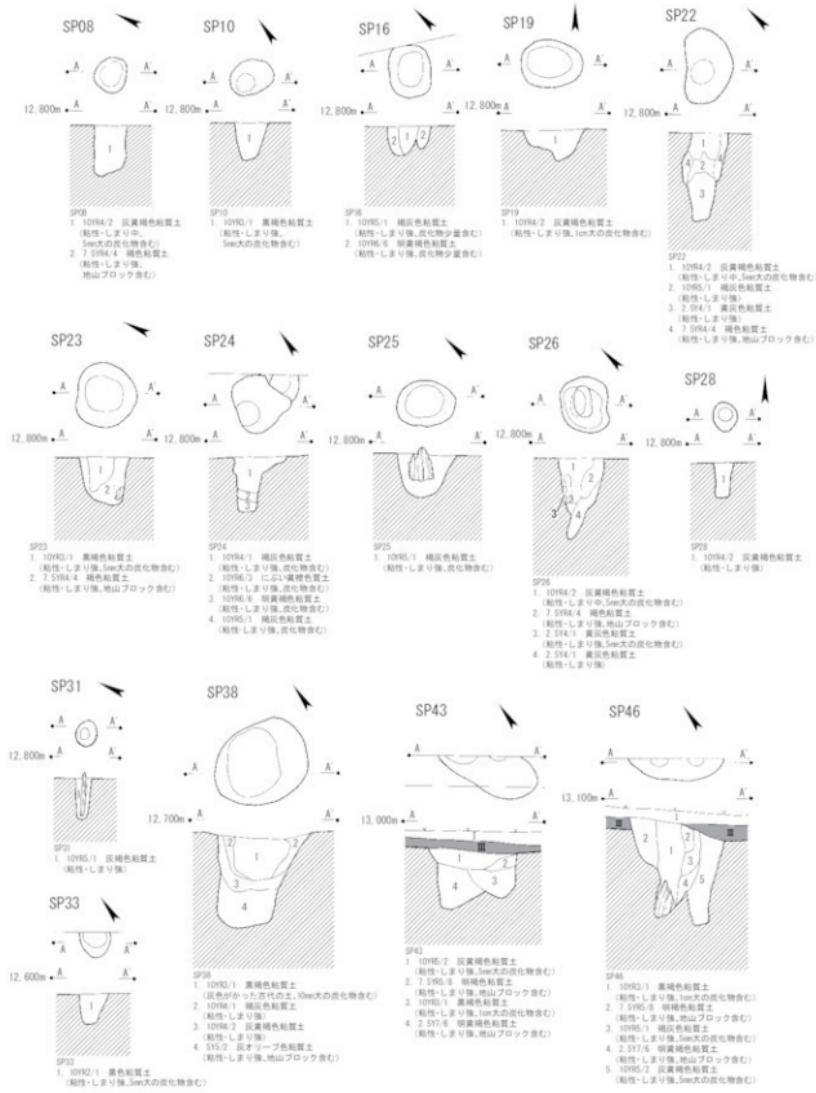
東トレンチ遺構図(4)

図版6



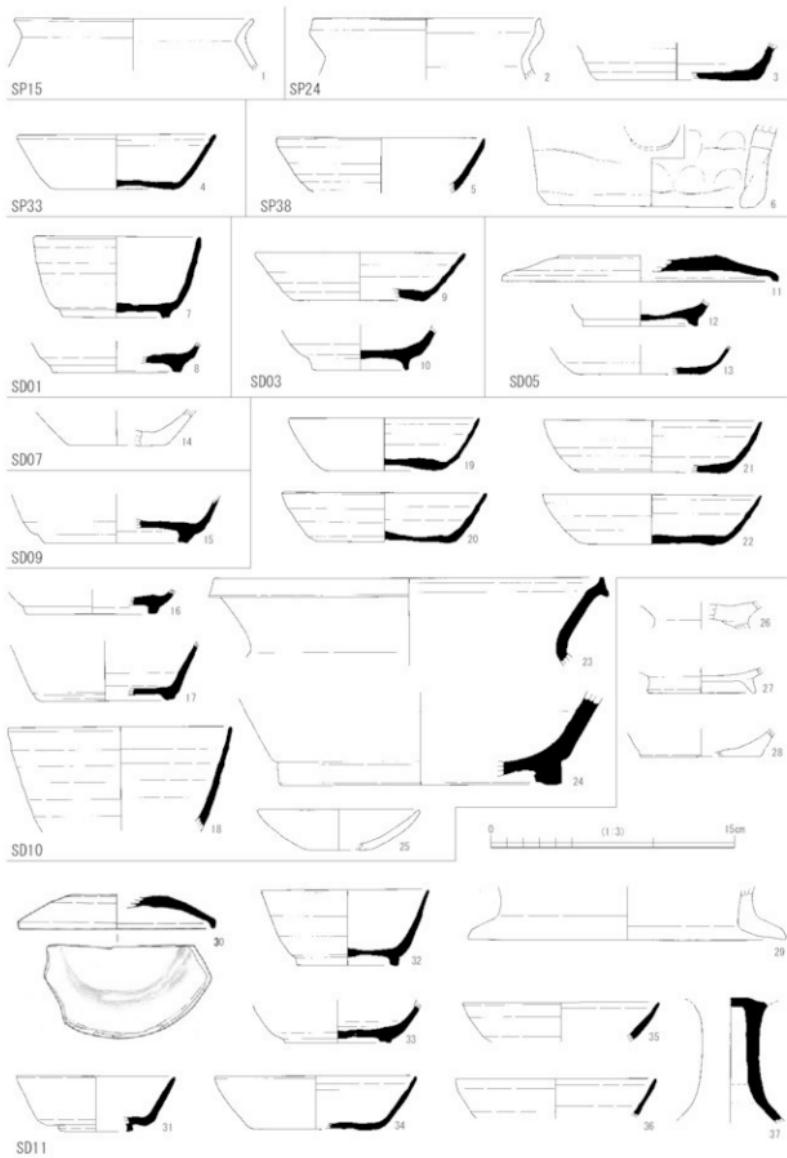
図版7

東トレンチ遺構図 (5)



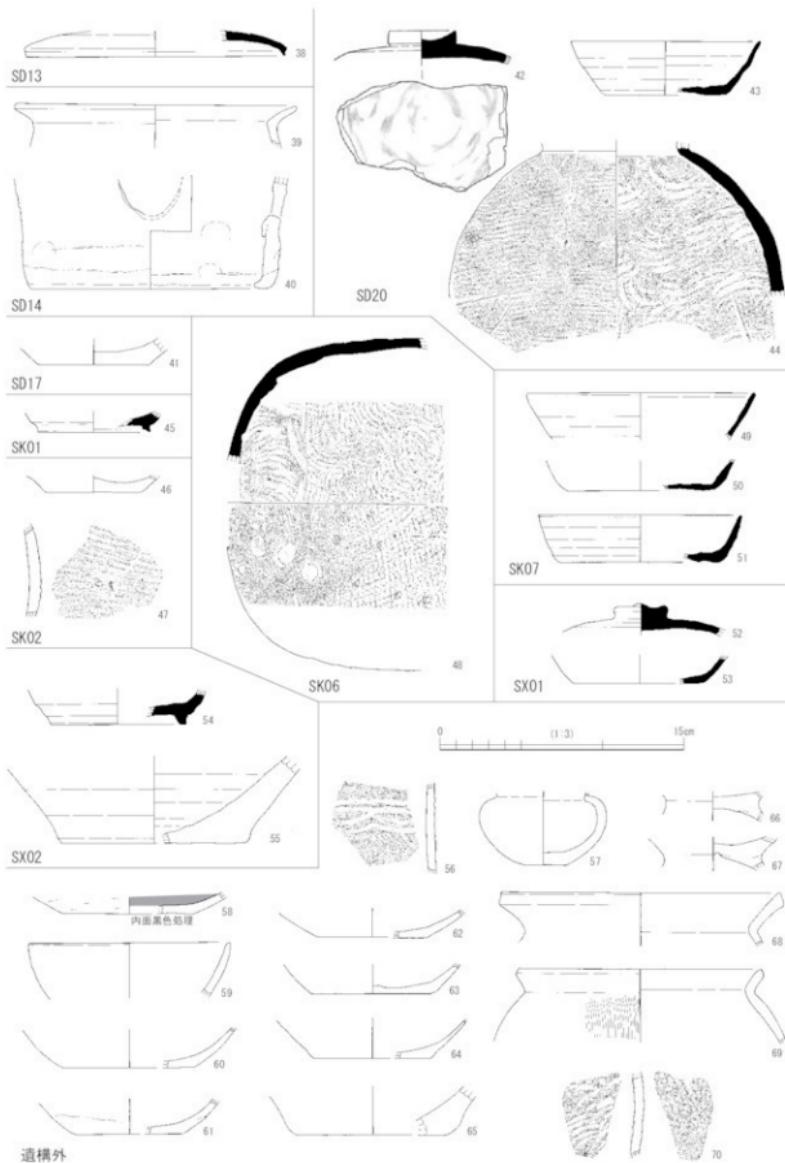
遺物実測図（1）

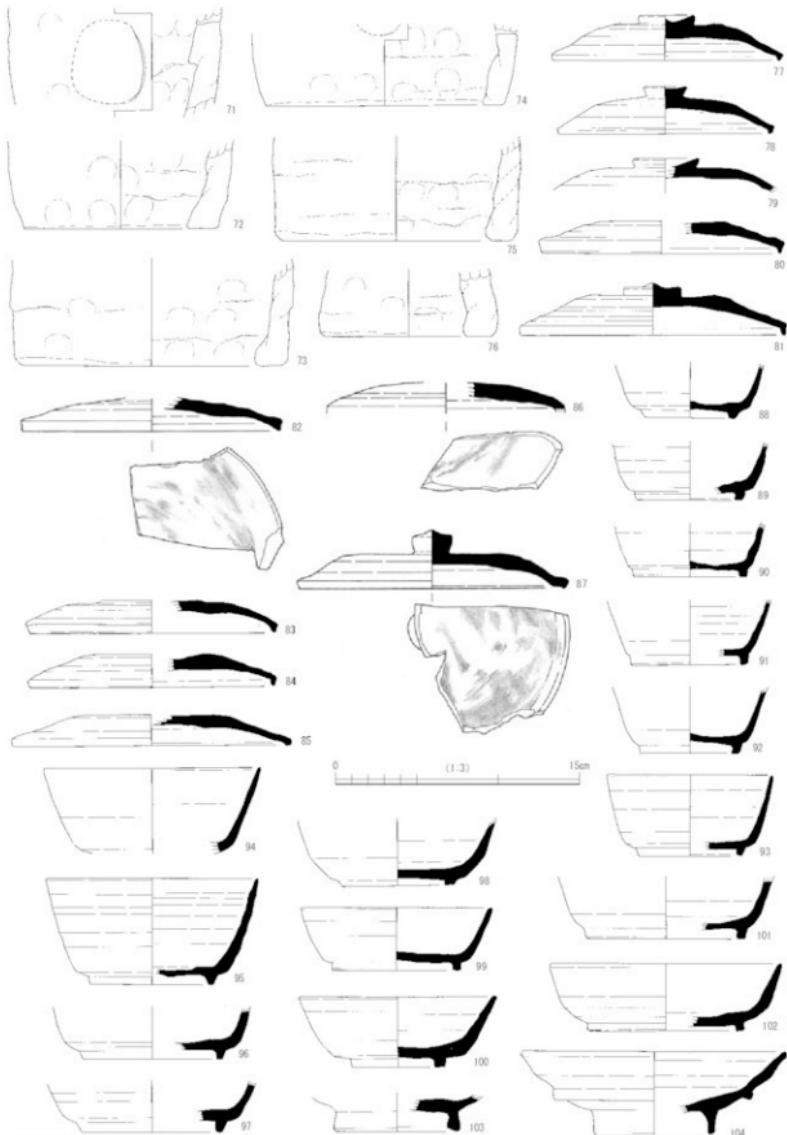
図版8



図版9

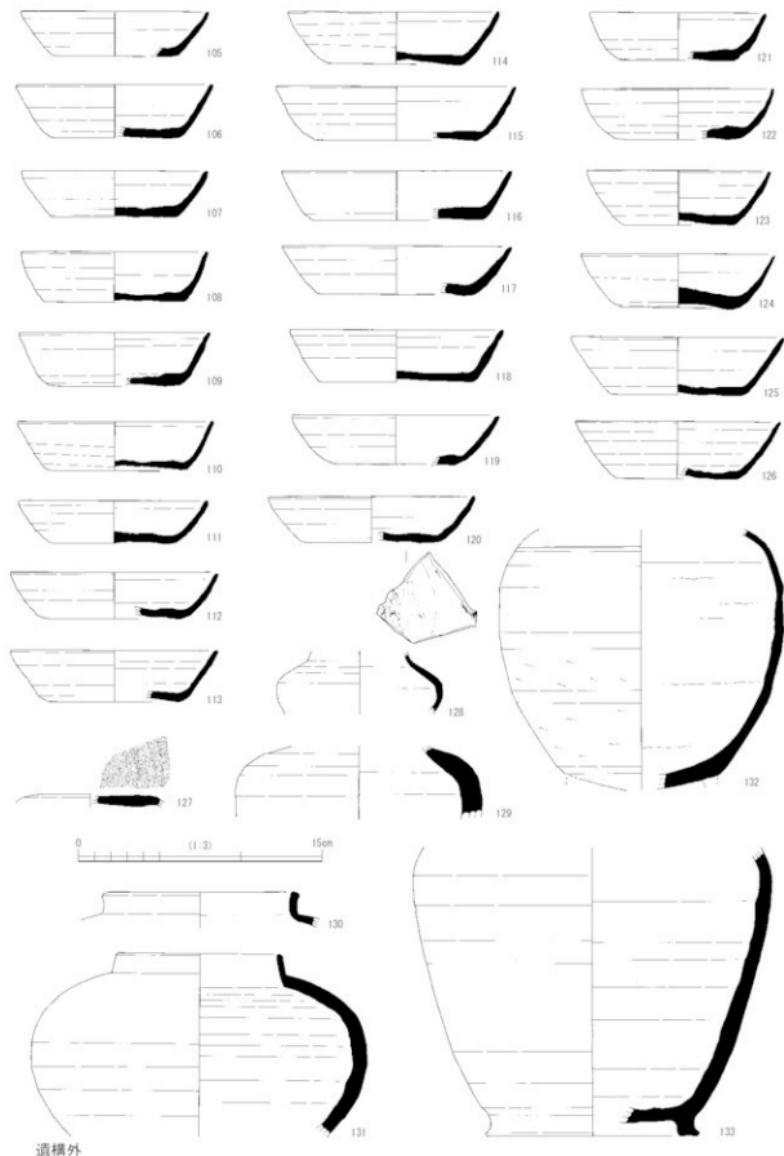
遺物実測図（2）

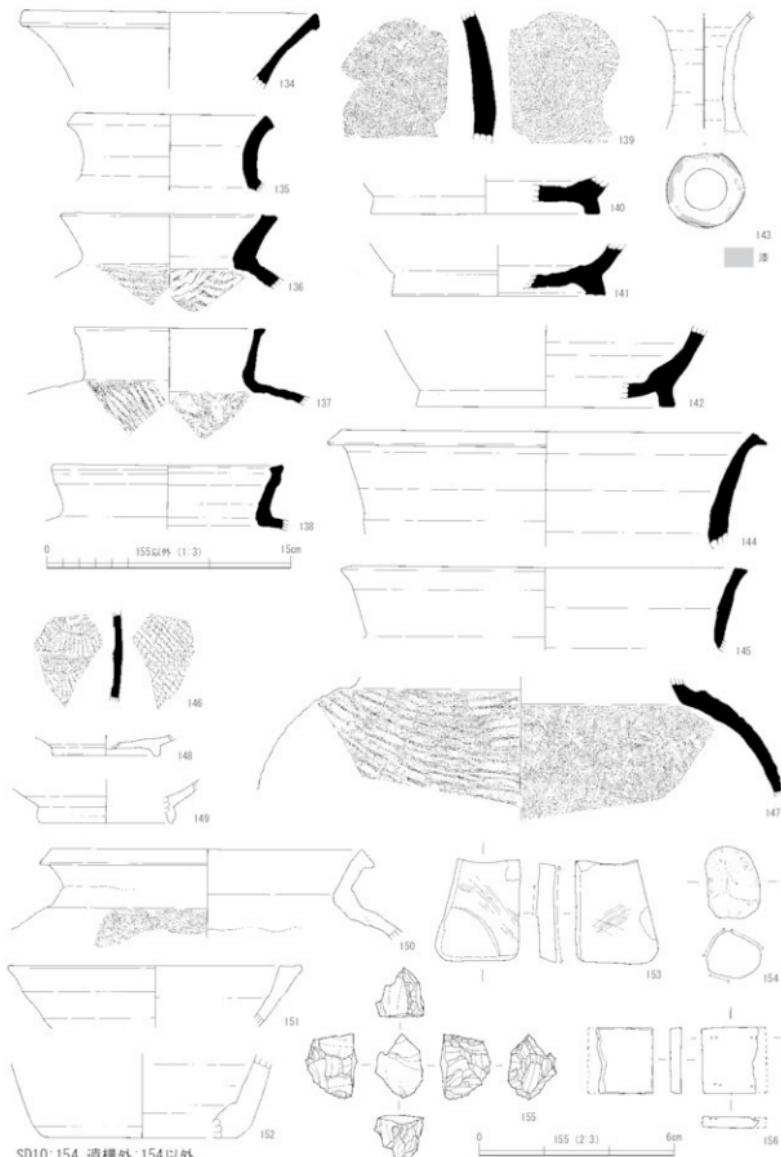


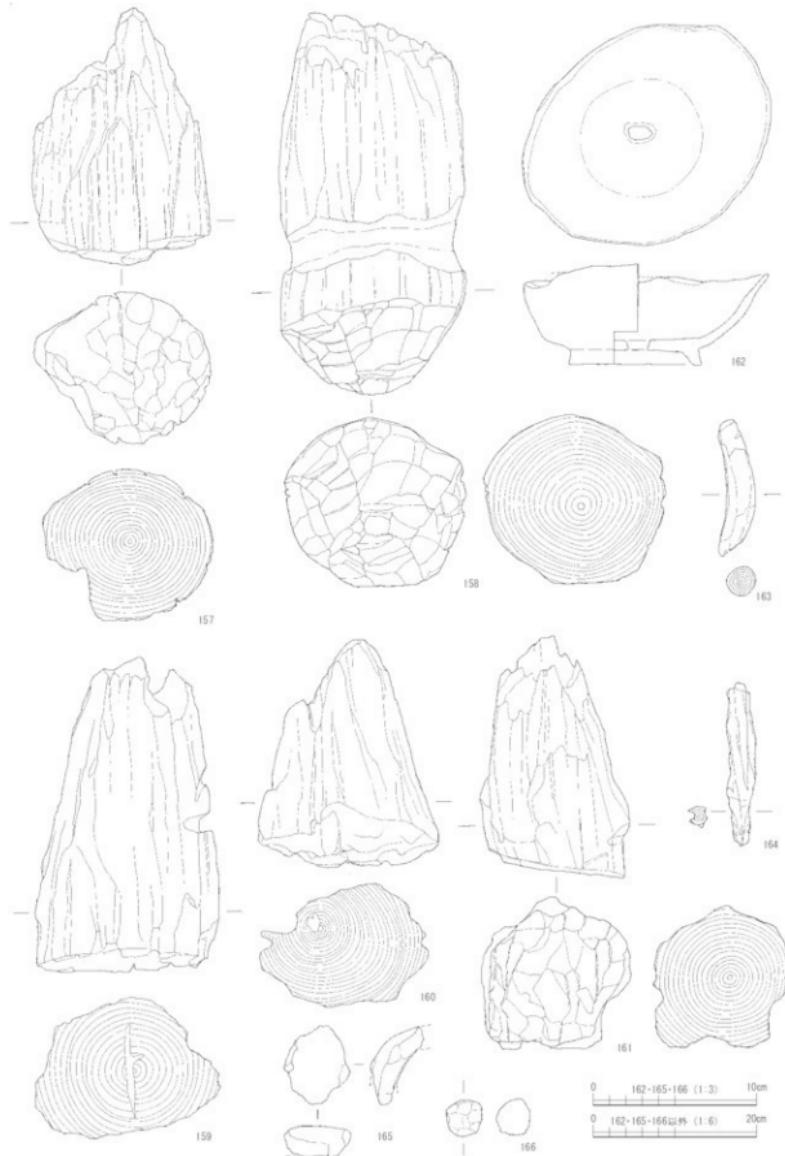


図版11

遺物実測図 (4)







SP07: 157, SP09: 158, SP15: 159, SP25: 160, SP46: 161, SK02: 162~164, 遺構外: 165~166



吉竹北遺跡全景（南から）



東トレンチ調査前（西から）



基本層序（南トレンチ）



基本層序（西トレンチ）



東トレンチ完掘状況（西から）



東トレンチ完掘状況（東から）



東トレンチ整地土検出状況（東から）



整地土内須恵器出土状況

図版15

遺構写真 (2)



SD07 完掘状況（東から）



SD07 B-B'セクション（東から）



SD11・SD12・SD13 完掘状況（東から）



SD11 A-A'セクション（東から）



SD13 セクション（東から）



SK06 セクション（南から）



SK02セクション（東から）



SK02 漆器椀出土状況



SP07 セクション（北から）



SP15 セクション（南から）



SP16 セクション（南から）



SP22 セクション（南から）



SP26 セクション（南から）



SP28 セクション（北から）



SP35 セクション（東から）



SP46 セクション（南から）

図版17

遺構写真（4）・作業風景



北トレーンチ 完掘状況（南から）



西トレーンチ 完掘状況（東から）



南トレーンチ 完掘状況（北から）



表土除去作業



調査風景



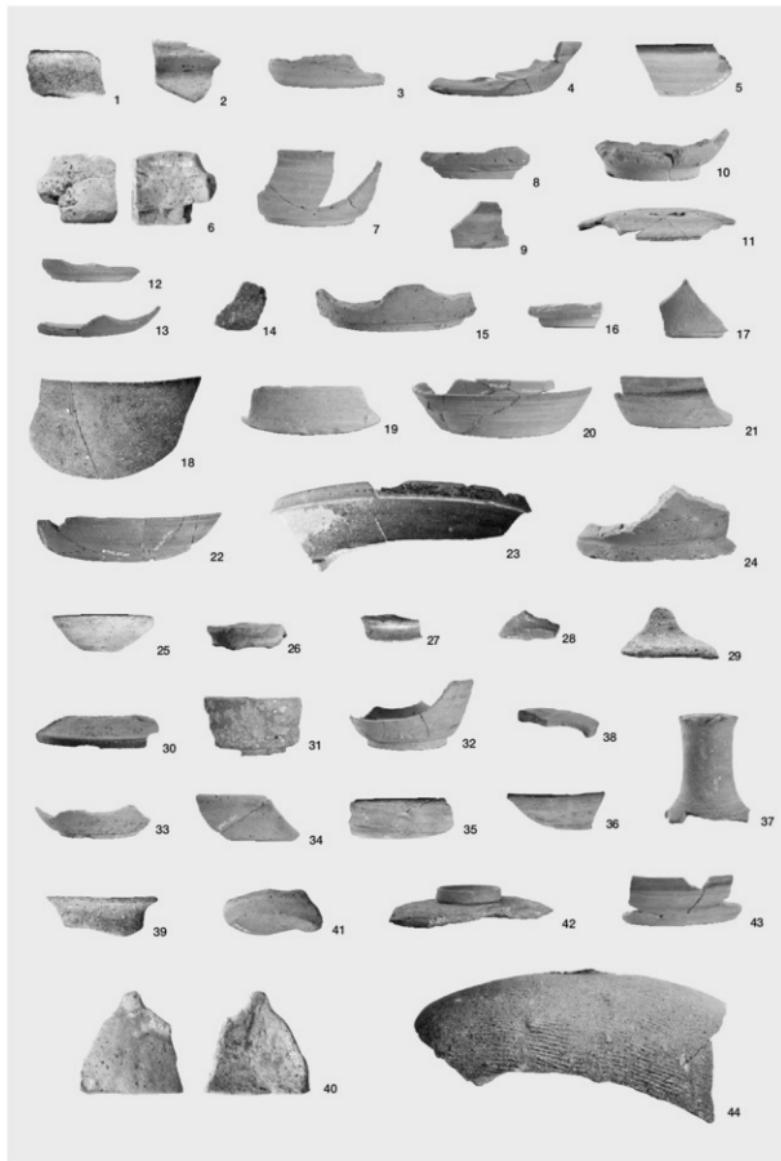
包含層調査

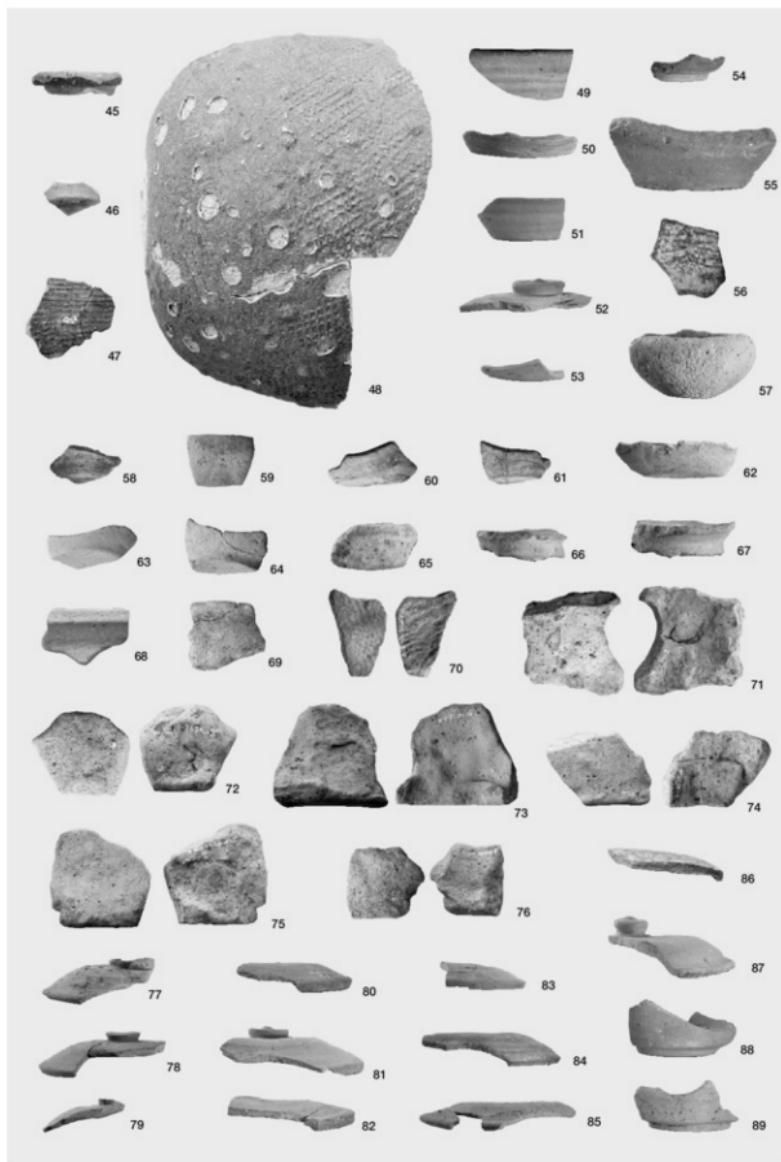


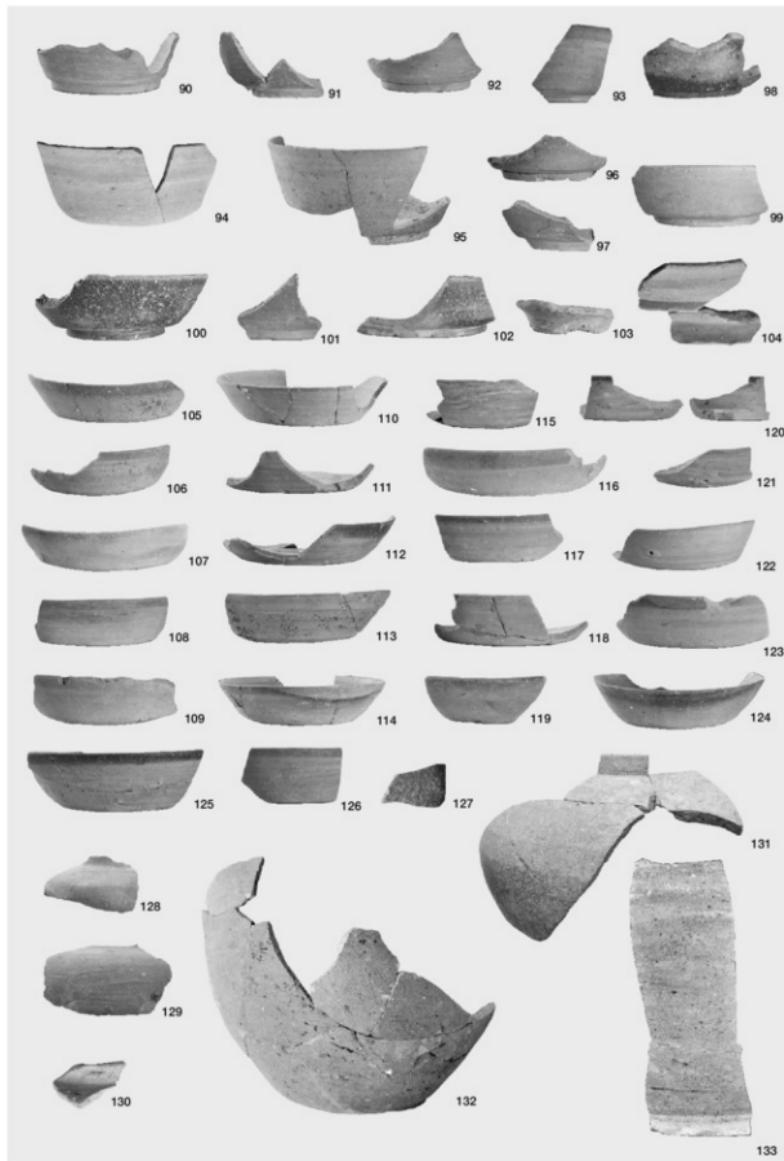
遺構調査

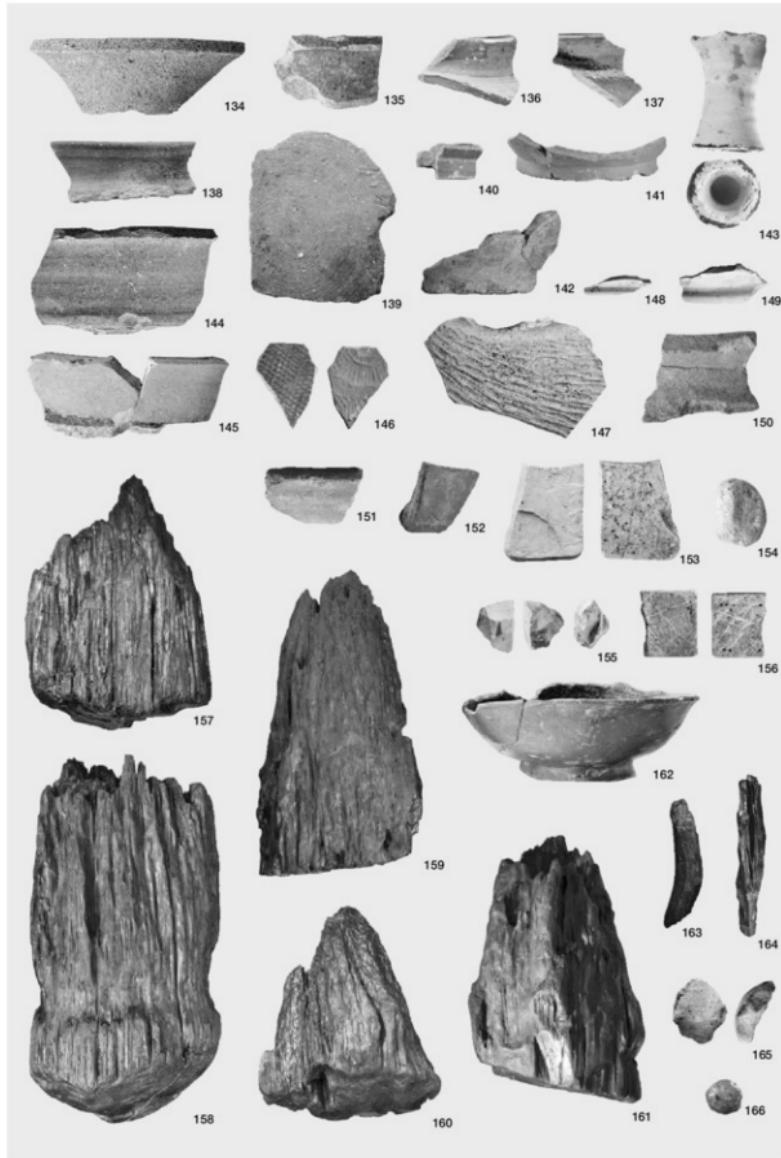


整理作業









報告書抄録

ふりがな	よしたけきたいせき							
書名	吉竹北遺跡							
副書名	県営経営体育成基盤整備事業（潟3期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	加藤由美子							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2011年12月28日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
吉竹北遺跡	新潟県長岡市 寺泊夏戸	15021	1265	37° 36' 40"	138° 45' 47"	20101004 ~20101113	450 m ²	県営経営体育成 基盤整備事業 (潟3期地区)
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉竹北遺跡	集落跡	平安時代	孤立柱建物 土坑・溝 ピット	須恵器・土師器 灰陶陶器・黒色土器 砥石・巡方・墨漆椀 製鉄関連遺物		佐渡小泊産の 須恵器が多数 出土。		

吉竹北遺跡

県営経営体育成基盤整備事業（潟3期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成23（2011）年12月28日 印刷

平成23（2011）年12月28日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 株式会社サンワプロセス